

年号	西暦	年齢	事項
寛永二二	一六四四	1	伊賀上野の松尾与左衛門の次男として誕生。幼名金作、通称甚七郎、名を宗房と称す。
明暦二	一六五六	13	二月、父没。
寛文二	一六六四	19	このころ、藤堂良忠（俳号蝉吟、当時二十一歳）に仕える。
四	一六六六	21	松江重頼撰の「佐夜中山集」に松尾宗房の名で二句入集する。
六	一六七二	23	四月、主君良忠没。藤堂家を出て、京都に上る。
一一	一六七四	29	一月、「貝おほひ」成る。一月、江戸に下る。
延宝二	一六七四	31	北村季吟より秘書「埋木」の伝授を受け、俳諧師の免状を得る。
三	一六七五	32	この年、俳号桃青を名のる。
四	一六七六	33	帰郷し、甥の桃印（十六歳）を江戸に連れ下る。
五	一六七七	34	日本橋に住み、神田上水の水役（事務）を副業とする。
七	一六七九	36	「松尾宗房入道」と名のり、剃髪する。
八	一七八〇	37	深川の草庵（のちの芭蕉庵）に入る。
天和元	一六八一	38	門人李下寄贈の芭蕉を庵に植え、芭蕉庵（第一次）と号す。 「芭蕉野分して盃（たらい）に雨を聞く夜かな」 このころ、仏頂和尚のもとで禅を学ぶ。
二	一六八二	39	三月、「武蔵曲」刊。芭蕉を名のる。 十二月、江戸の大火で芭蕉庵焼失。甲斐（山梨県）に移る。
三	一六八三	40	五月、江戸に帰る。六月、母、郷里で没。九月、芭蕉庵（第二次）再建。
貞享元	一六八四	41	八月（〜翌年四月）、「野ざらし紀行」の（千里を同行）旅。 「野ざらしを心に風のしむ身哉」 冬、「冬の口」刊。
二	一六八五	42	この年、曾良が入門、芭蕉庵近くに住む。
三	一六八六	43	「古池や蛙飛びこむ水の音」を巻頭に「蛙合」を催す。
四	一六八七	44	八月、「鹿島紀行」（曾良・宗波を同行）の旅。 十月（〜翌年四月）、「笈の小文」の旅。 「旅人とわが名呼ばれん初しぐれ」
元禄元	一六八八	45	八月、「更科紀行」（越人を同行）の旅。
二	一六八九	46	三月、芭蕉庵を売却し、「おくのほそ道」（曾良を同行）の旅。「曠野」刊。
三	一六九〇	47	四月、幻住庵に入る。六月、「ひざし」刊。
四	一六九一	48	四月（〜五月）、嵯峨の落柿舎滞在。「嵯峨日記」刊。 七月、「猿蓑」刊。 十一月、江戸に帰る。
五	一六九二	49	五月、再興された芭蕉庵（第三次）に移る。
六	一六九三	50	三月、甥の桃印没。
七	一六九四	51	五月、西国旅行に出発。 九月、大坂で発病し、十月十二日花屋仁右衛門宅で没。膳所の義仲寺に埋葬される。